

流域文化の成立と定住様式の変遷に関する
文明生態史的研究（昭和55年度）

齊藤 一 雄

- 代表者：辰巳修三（昭53, 54） 齊藤一雄（昭55）
分担者：<都市域>
（教官及び研究者）坂下昇 安田八十五 土方正夫
<北上山系>
遠野：掛谷 誠他
安家：川喜田二郎 糸賀 黎
齊木崇人他
葛巻：岩城英夫他
<和賀川流域>
辰巳修三 齊藤一雄 糸賀 黎
土方正夫 真貝 宏 秋山洋子
相原良安 江崎春雄 佐原伝三
上野正実 瀬能誠之 鈴木博雄他
<北上川中, 下流>
黒崎千春 天田高白他
<松尾村>
糸賀 黎他
<農林>
小田桂三郎 大垣智昭 鈴木芳夫
花田毅一 山下雄三 市川忠雄
中島紀一 清水利昭
<環境衛生等>
山中 啓 下条信弘 小池和子
酒井賢一郎
<メンタルマップ>
安仁屋政武
<自然保護>
藤原英司

1. はじめに

本調査報告は3年目の今回を以て一応打ち切られることになる。総勢20名をこえる大プロジェクトであり、この種のものとしては統合が困難なこともあって、その成否は、年報2に示した様な研調査組織や方法論と共に関係者の注目を浴びていたものであった。事実は、3年目をおえてよく地元各地からの積極的な反応がみられる様になったわけで、我々の間でも、今後この研究をづけるべきだという聲はつよい。

第1年目(昭53)は、対象地域全体についての問題のありか、調査重点項目の明確化を図ること主であった。総じて、北上諸地域の近代化の矛盾(連帯感の喪失、機械化貧乏、教育の不毛、地内就労の困難性など)を具体的にひきだすことができたといえよう。

第2年目(昭54)は、第1年目の作業を補足しつつ具体的な事実の相互関連を明らかにして問題構造をさぐろうとする段階で、諸問題の位置づけを明らかにすることに向けられた。

第3年目(昭55)は、地域のそれぞれの問題について専門的な見地からのくわしい調査がすすむ一方、全体の調整が行われた。全体の調整については、地域によって調査進度にズレが生じていたので、北上全域についての重要課題を荒けずりにでも把握しておくことが問題の統合にとって有効ということで一致し、いわば<エゾとは何か>という北上自体の個性に關迫する、後述の様ないくつかのテーマが選択されて集中的に討議された。この論議が事実上最終年度のまとめの軸となった。

2. 討議の内容

調査対象地域は前年度と同じで、(1)和賀川流域(沢内、湯田、和賀、江釣子、北上)、(2)松尾村、(3)岩手町、(4)葛巻町、安家、(5)遠野市、(6)盛岡市等都市群、(7)下流域、の七地域である。

昭和55年11月8日から56年2月14日まで、会議室(A 505)で北上プロジェクトについての公開ゼミが開かれ、下記についてそれぞれの調査結果を発表し討論が行われた。カッコ内Aは問題提起者、Bはパネラー、◎印は司会である。

1. 北上河谷の特性と空間パターンの形態について(A: 黒崎, 天田, B: 川喜田, ◎小田, 大垣, 千葉, 真貝)
2. 地域形成のオーガナイザーは何か — 川は流域形成にどのような役割を演じてきたか — (A: 斉藤, 黒崎, B: 天田, ◎糸賀, 小口, 杉山, 井関, 金山)
3. 落葉広葉樹林帯とはわれわれにとって何か — 奥羽山脈と北上山地の比較を通して — (A: 川喜田, 岩城, B: ◎藤原, 糸賀, 足立, 橋本, 小林, 市石)
4. エゾとは何か — 移動的人間と定着的人間 — (A: 川喜田, 加藤, B: 千葉, 黒崎, 山下, ◎齊木, 土方)
5. 新しい変革に向かってチャレンジしている町村の模索の姿(A: 糸賀, 大垣, 花田, B: ◎斉藤, 大垣, 清水, 市川, 鈴木(芳), 中島, 上田, 馬場)
6. 近代化とは地域社会にとって、何を意味するか(A: 市川, 坂下, B: 川喜田, 斉藤, 大垣,

花田, 杉野, 市川, 清水, 鈴木(芳), 中島, 上田, 齊木, ◎土方)

これらの総まとめは、川喜田二郎教授が自ら創始したKJ法により、それぞれの論議をラベル化してまとめた。ラベル数は膨大であり、ラベルに密着してまとめられた川喜田教授の御努力に深く感謝する。以下の本項の記述は、川喜田教授のまとめを筆者なりに要約したものである。

(1) 南高北低とそのエコロジカルサクセッション

文化の成熟度の一指標として、士族と随伴する傾向のある医師の数の分布調査(黒崎)やアイヌの近世に於ける分布(津軽半島)にみられる様に、近世でも南高北低の文化の高低があり、この落差を保ちつつ南の文化が北上するという文化のエコロジカルサクセッションがみられる。

(2) <南からの無理押し>と<人工と土のハザマ>

稲作にみられる様に、地理的環境が不向きでも、江戸時代以来官民協力して成果を挙げてきた。南の伝統文化を担った人々は、北地向きという点では伝統文化の修正的適応や部分的文化借用(cf: 同じブナ帯の西欧型農牧の進行とその限界)でゴマ化し、根気よく南の文化を北に押しとおそうとし、生活様式を本質的には北向きにしようとしな。そのため、東北地方は、生態系に歪みを孕んだまま、日本の中の周辺的地位に甘んじているのではないだろうか。南の文化は洗練された人工的文化であり、北の文化は土的な文化といえよう。この断層にパイプを通す役割、つまり、貸借と集団安全保障の上でエコロジカルな役割を演じたのが大地主制や地頭名子制ではなからうか。その著しい階級差の矛盾に対して、東北に於ける近代的合理主義の主唱が上層階級から生じたのも特徴のひとつである。

(3) 近代化の功罪

かつては、沢内村の調査(橋本)でも判明した様に、集落と森林との関係は小流域単位でひとつの自給的体制をもっていたものとみられる。こうした小単位の生態系の均一な分布での流通パターンが明治中期以降主に鉄道網によって大きく変化する。一方で人間の行動領域が縮小されつつ、他方では地域の再編、格差増大が大巾にすすめられた。新幹線、高速車道の開通は、今までの局地閉鎖性を打破し、経済活動や人間接触の広域流動と集中、集約化を促進するのではなからうか。

(4) 生態史的秩序の把握

日本の基盤文化の性質を知る上で、従来のように、照葉樹林文化論が主流を占めているが、歴史的には必ずしもそうではない。北上の研究はその試みのひとつである。まず、オーガナイザー(形成者)を核に地域の有機的結合をもたらしたヒューマンスケールの地域的生態単位の基本的な重要性を認めるべきであろう。この様な空間パターンを論ずるとき、大工、左官、屋根葺き職人の行動領域をさぐることも必要である。盛岡が、北のヒエ地帯と南の水田地帯の境目にできた様に、マーケットは節目になることも注意すべきだ。

生態学パターンを確定するには、最低次の3条件を具備する必要がある。

- ① 栄養学的にリサイクル性があるか?
- ② 資源にリサイクル性があるか?
- ③ 生活が成り立つだけの適正規模を持った生業か? (たとえば畜産を伴わない<熟畑民>など)

は存在したかどうか疑わしい)。

北地型の〈採集、漁労、狩猟〉の上に、猪のキーピング、焼畑、熟畑、牧畜、稲作などが累積的に順次加わり、縄文人・エゾの文化の流れを今にのこしているとすれば、その累積が統合された空間パターンを、現在の中にさぐる必要がある。また、北上山地で主に、南が馬、北が牛という地域格差のあったことを含め、昭和30年代までの、牛馬を中心とした家畜と農家との永いつきあいのあり方を生態史的にしっかりと捉えることが大切である。北上の独自性をとらえて真の活性化を図るには、広い視点から日本全体について生態史的刻印と現在の一般的潮流をよみとりつつ的確に生態系パターンをとり出して再構築すべきである。

(5) 日本に存した生態史的統一の理解を

日本列島の生態系には、はるかな昔から大陸北方から北日本へというルート（アムールランド文化）と南海回り西日本へという二つのルート（アッサム＝雲南からの水界稲作民即ち倭人文化圏の原型）が考えられている。

倭人の到来が弥生時代のはじまりである。これを追う様に、すぐれた鉄器文化をもった古墳文化人が侵入したとみられる。いわゆる大和文化とエゾ文化との二つの流れが日本文化形成の基盤となった。この接点は大まかには、温帯指数85°ライン（秋田城と多賀城と連ねる線）前後と考えられる。大和文化は低地、谷地を占め、多賀城以南でも山地部に土着の縄文期以来の文化が点々とのこされた。この担い手を山岳民とよぶこととする。この谷住み族、山岳族の相互影響と、平安期以前までこの編成の圏外にあったエゾの文化と三つ巴の文化的伝統が空間的にそれぞれの生態系を形成して存立していた。そして、騎馬民族文化は、アムールランドからのルートにのってエゾ地に入ったものと思われる。それは北上山地が良馬の産地となったことから類推されよう。

白村江の敗戦以来、大和政権は優良騎馬を求めてエゾ地をねらう。それはエゾ自体の騎馬群団化と衝突し、律令前後以後のエゾ征伐の形をとる。この騎馬軍団の新たな形成は源平武士階級によってにぎられた。水界民の流れの中で育った水軍も源平の手中に帰した。そして大和文化とエゾ文化の二つの流れの接触がその後の問題となったわけである。東北史の専門家高橋富雄氏の形容によれば、西日本は貴族的、都市的な王者の文化、東日本は農村的、武士的な勇者の文化をつくったという。この両者のダイナミックスが日本文化の形成に大きく作用した。

(6) エゾからの再出発が必要

近代社会の文化の性質は、ハードな面のみ先行し、ソフトな面がおくれており、跛行的である。そのため、文化というものは本来環境と社会との間をとりもって生態系としてのリサイクル性や調和をもたらすべきものであるにもかかわらず、その役割、機能を十分に発揮できていない。そこで、人間と環境との間に血が通わなくなり、伝統社会と近代社会との円滑な一本化が地域的にも時代的にも阻まれているのではないか。経済面でも、使用価値と交換価値とは調和した状態にはない。それも近代化につれてそうなった。この解決に情報伝達の迅速化で大地域の合理的編成が可能という楽観論と、小地域の循環を中心として解決しようとする見解とあって一様ではない。また、たとえば東北の牛飼いは経済性をこえた愛情が基礎となっているという事実も加味してこの問題を考えな

なければならない。

農業機械についても、機械化による省力化がなされても、機械化のための費用のつぎこみからくる機械化貧乏がおこっている。ダムによる水田面積の飛躍的増大（和賀）や機械化がすすんでいても、農地の保全、管理の社会的組織は、旧村単位の傾向をもつが、水利による巨大システムの影響は否めず、新たな対応が模索されている。

町村の主体的活力は現在町村単位をでていなく、郡単位には及んでいない。巨大システムは見かけ上の高生産性をもたらした半面、生態系の再創造みりもむしろその歪みと解体をもたらしている。そこで住民は、その内部に混乱をもちながらも、下からの真の活性化を求める聲も決して弱くはない。

昭和43年以降、宮林局の方針による〈広葉樹林伐採と有用針葉樹の増殖〉いわゆる〈拡大造林〉が行われた。これについては様々の批判が行われているが、重要なことは、沢内村でも安家でも、国有林の経営が住民と密接に関係しているにもかかわらず、その実態把握が行われていないところにある。たとえば安家の場合、〈おらが山〉と思って落葉広葉樹林帯の採集的な複合経営に生きてきた住民は、拡大造林にとまどい、反発しつつ、伝統的な農畜林コンプレックスの線上での新展開を模索している。沢内村では、農民の間の森林保続に関する集落単位の有効な経験のストックを無視して、独立採算や栽培マインドだけで広い面積の単能的な土地利用をすすめている。

従来のように日本文化観に於て主流を占める西南日本的ドグマで岩手県を料理することは岩手をいつまでも僻地にしておくことにつながる。岩手の中でも自ら理論武装をし、住民のエネルギーを集集し、広い世界の潮流をとらえ、地域ポテンシャルの集約化に成功している町村がいくつかある。その事例から地元も我々も学ぶべきことが多い。西南日本的ドグマと共に、個性を無視し物益だけで上から巨大システム化をはかる近代化の解体力という二つの側面が東北の活性化を妨げている根源的なものである。ここに、エゾ生態系の本質と伝統に目ざめた、下からの地域創造の道を探究すべきである。つまり、〈エゾからの再出発〉ということである。

以上が、北上ゼミのまとめとして川喜田教授が書かれたものの要約である。もし不都合の所があれば筆者の筆のせいであって、責は筆者にある。

3. 修士論文に於ける成果

本調査研究にかかわる修士論文は9篇にのぼる。これらの成果は、個別に前述の討議の中に反映されているが、あらためてここにその要旨を加えることにする。

足立は、畜産団地として有名な葛巻町等の放牧地の荒廃裸地について、エロージョンの状況、裸地拡大時期（11月、4月、5月）、植生動態の諸相（シバ草地、森林、草本群落、裸地）を明らかにしてその管理の基礎的研究を行い、金山、杉山は、遠野地区に於て、長期住みこみによる調査を行い、前者は、かつて早池峰山の宿坊村として栄えた大出部落について村落リーダーの変遷について分析し、宿坊村—炭焼、馬産、—水田という様に村の生業の経済基盤の変化に応じてリーダーが代っていったことを詳細に追いながら、その村全体に於けるメリット、デメリットをさぐった。

後者は、〈イドウシ〉とよばれる血縁地縁を基盤として、住民の共同活動が行われていること、それが外部からのインパクトを緩和する機能をもちながらも積極的創造的な活動母体となっていないことを、生業及び社会関係の分析をつうじて指摘した。

安家は、現地に安家大学を開いて地元との協同研究の方向をうち出した。ここでは、小林⁴⁾が伝統的な牛飼養形態について研究した。牛の飼養形態は他品種肉用牛の導入や乳牛資本や機械の導入或いは農地改革という変動がつづいたのにもかかわらず昭和40年代までその飼養形態は変化せず、日本短角種肉用牛の仔牛を夏山冬里方式で生産し、飼養頭数も400頭前後で持続してきた。それは経済的メリットだけでははかれないものであり、牛への愛情はもとより牛飼養が生産生活の生態系の中で有効に機能していることを発見した。しかしそれは昭和40年の高度成長期以降変化し始めた。それには従来⁵⁾の価値観への⁶⁾圧迫が重くのしかかっていることを指摘している。巢山は、伝統的技術体系と外部経済依存型技術系との相違を人間主体の問題として把握するとき、その核心部に位置するものは〈使いこなし〉という概念によって表現される住民の〈技術観〉であることを具体的に指摘し、それと社会組織や経済との関係を考慮した〈適正技術〉を研究する必要を論じた。市石は、安家の国有林は、安家住民にとっては〈おらが山〉であるが、昭和36年度以降の営林局の拡大造林政策以来、林野の〈企業的運営〉によって、単純な有用針葉樹の増殖が行われはじめ、伝統的な火入れや牛の放牧、山菜採集等の農畜林コンプレックスが規制を加えられ、住民にとっては生産、生活の環境はひびわれし、〈山離れ〉現象がひろがりはじめていること、そして、安家の村人は自分たちの将来の生活についての意欲はもちながらも理論化はできず、したがって組織力もないが、国生協と営林署とのかつての共存関係を省みれば、問題解決の芽はあると指摘している。

馬場は、高冷のきびしい環境にある松尾村について、その観光レクリエーションの方策を、前年の木原茂夫の研究の土台の上に探求した。フィールドは、戦後の入植集落である金沢と、江戸中期以来の純農村である畑について、前者は村の大規模な別荘村をもつ観光開発の拠点として、後者は農林水産省の自然休養村事業をすすめる部落として位置づけ、その比較研究を行った。両者の主体的条件の大きな相違は、土地への執着の強弱であり、あくまで農業を基本とし、付加価値として観光を位置づけて自立態勢をすすめる畑部落について、その歴史的ストックによる部落構造の安定性を指摘した。

和賀川流域については、若林、橋本、杉野が報告した。前二者には、農林学類の蔵井淳二、倉知秀郎、嶺嶺尚明、矢沢(旧中島)容子も共同研究者として関係している。若林は、沢内村について、戦後(昭22、23)、中同(昭38)、最近(昭51)の航空写真と国土地理院発行の地図及び現地踏査から土地利用の経年変化を研究し、変化度をユークリッド距離による三角モデルによって測定した。これによって和賀川西部が最も土地利用の変化が少なく、北部、和賀川東部の耕地部分に牧野、水田等に顕著な増加があったことを数量的に明らかにした。橋本は、沢内村に於ける森林利用の状況(山菜、キノコ、木の実、まき、木炭、放牧と採草、狩猟)とその背景(営林署との関係、細流域内活動)、森林地の地形土壌、植生との関係等を、踏査とききとりとその分析によって森林利用の地域パターンを導き出した。そして、沢内村に於ける林業問題について、住民が行ってきた森林の歴

史的な保続単位を小流域環境単位として把握し、それを基礎に拡大造林のかかえる問題について提言を試みた。杉野は、前年の長橋敷の研究をひきつぎ、血縁、地縁などの重層構造をもつ和賀町南岸の煤孫中通地区及び新しい開拓部落である岩崎新田農場地区について比較研究を行い、村落が現在崩壊過程にあるという一般的見解に対し、両地区をつうじて形はちがうが村落がなお農地の保全管理主体としての可能性を保っていることを、〈ひろがり〉、〈まとまり〉、〈からまり〉という空間概念を用いて解析した。

これらの論文は、対象が間口も広く奥行きも深いだけに、かんたんに結論を出せないものばかりである。この種の研究は数年にわたるドキュメントをつみ重ねる必要のあるものもザラで、そのため往々にして科学的研究として理解されにくいことも少なくないが、環境科学としては、こうしたフィールド研究は重要で、性急にすぎることなく研究をひきつぎひきつぎつみ重ねてその本質に肉迫していく覚悟が必要である。この点その評価を誤らないことをねがう。

(註) 文中修士論文の氏名、テーマ名は年報の修士論文の概要の項参照。

4. 生まれた概念と今後の問題

北上プロジェクトは一応3年継続で終止符をうった。ここにこの調査研究の強力なリーダーであった故辰巳修三教授に対しあらためて深い感謝の念をささげる。また、多忙な勤務の中でこのプロジェクトの進行に多大な精力を割いてがんばってくれた齊木崇人、土方正夫の両技官に、全研究員を代表して讃辞と謝意とを申し述べる。

本研究の方法は、川喜田教授のKJ法を軸として、それぞれの方法や専門レベルの方法を位置づけながら進行した。その中で最もつよく仕込まれた合意事項は、〈現場に密着〉することと知見の〈共有化〉につとめることの二点であった。つとめたことに深淺はあるが、その方向はつねにフィードバックされて、観念的独善や部分化や研究成員の分解を防ぐ歯止めとなった。そして、専門者間に於ける問題の共有者の基準フレームの作成の論理がレベル論であった。こうした協体制制のもとにトラブルを克服しつつ我々はつねに公開ゼミを公示し、自由な討議を歓迎した。

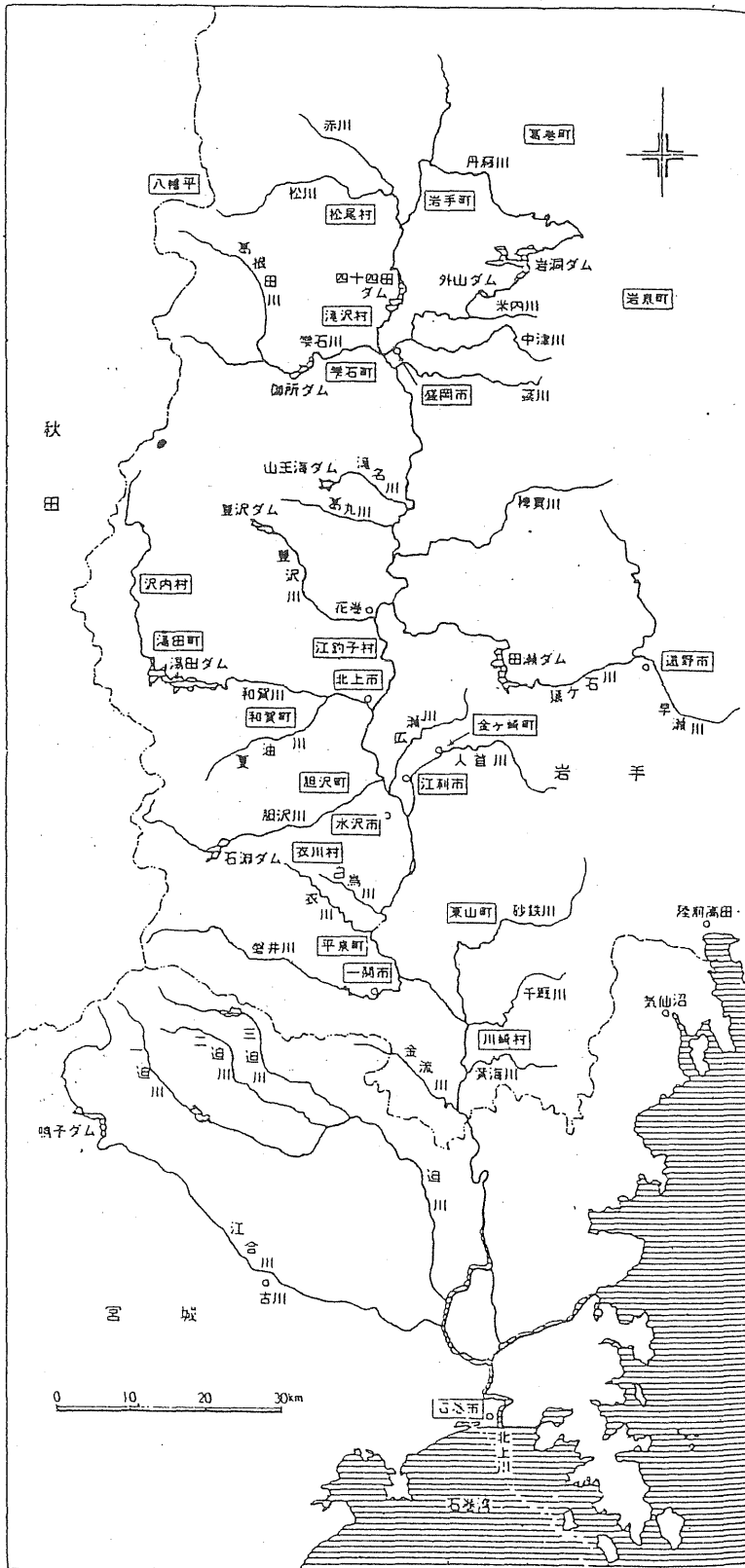
この様な態度を根拠にして、我々は〈キイプロブレム〉の把握を第1段階の最も重要な目標とした。キイプロブレムは事態の切口を生々しく具体的にみせるものであり、現在の矛盾(又は地域特性)をあらわに時に鋭く示すものであり、且つ住民の関心のマトであって、それだけ問題の共有化を強めるものでもあった。だからこの方法は、問題の本質に肉迫する最短距離のみちをひらく可能性が高い。沢内村や田野畑村や藤原町のリーダーが住民との精力的な対話をつうじて村の方向を的確につかむことができたのもやはり同じ考え方によるものと総括できる。それは生々しい利害を伴うだけに、時に客観的な判断をくもらせる危険もある。したがってリーダーの適性はその意味で大きく、科学者の参画も又その意味で重いといえよう。

リーダー論と言えば、オーガナイザーの探究が問題になった。自然の中の有機的関連は人が或る形成を目ろむ場合のサブオーガナイザーである。また、近代化の論議があった。これについては川喜田教授がまとめて述べているが、そのひとつに近代化イコール巨大システム化という図式が一応

あるわけである。巨大システムというのは、この場合物質的な巨大さということも勿論あるけれども本質的には住民が時代の一定の時点で自らコントロールできない対象を言っているとみた方がよいと思う。若しも人々が民主的にコントロールできるのであれば、スケールとしての巨大システムはヒューマンなものになりうる可能性が高くなる。沢内村の水利システムは今では集落の慣行的管理をはなれてより大きな土地改良区によってコントロールされる様になって上下流の思いやりなどうすくなり肌目があらなくなった。湯田ダム水利権は建設省ににぎられて、目の前の水を湯田の住民はどうすることもできない。それらは部落のヒューマンスケールをこえたシステムである。しかし、部落連合、村連合を形成しうる条件が成熟しているときは、それは物理的な個々のヒューマンスケールをこえるものでも、ヒューマニゼーションの否定にはなりえないであろう。その最もよい例は、平均50戸の部落を基礎単位とし、そのミニ計画を土台に、町の全体計画を練り上げる藤沢町の徹底した意志決定のプロセスである。それは原理的には村や町をこえたものにも適用できるのではない。しかし、湯田ダムひとつをとりあげても、真の総合開発的利用をはかる人々の要求は村をこえた広い連合組織を形成するには至っていない。この事実を探究する必要がある。

問題の討議の中で接点空間とか節目とか安定とかいう概念がでてきた。オーガナイザーやヒューマニゼーションなどと共にこれらの概念は、問題のとらえ方やきりこみ方にとって有力な武器となるものであって、調査研究の末に生まれてくる貴重な概念である。接点とか節目とかにもレベリがある。たとえば家と庭との接点としての軒内の存在の問題がある。縁側がコミュニケーションの最小の場であると私は言った（年報2）けれども、縁側の存否はさらに、欧米と日本との空間概念をわけるものでもある。沢内村の農家の近代住宅化が縁側を消失せしめたことを雪博士の高橋喜平氏が、沢内の文化をいっきょに低下せしめたものと批評したのもうなずける。接点や節目については川喜田教授を述べている。最後に安定という概念がある。安定、不安定論にはいろいろあるが、千葉教授は、旧家が村落内で多数を占めるか稀にあるかについて代数の多い農家は農業生活に於て経済的にすぐれた地位を保つことができたときみなされることから、旧家率を以て社会的安定度又は長期の定住地を求める指標として用いた。それは、川喜田教授の文化の安定度を生態系パターンの時間的継続の度合いでとらえることと併せて、今後の環境科学に於ける〈安定論〉の内容を豊富にさせることと思われる。

本研究はひとまず終わったことになるけれども、内容としてはやっと入口に到達した様なものだった。環境科学を考える入口でもあった様に思う。この研究は、有志をつのって形を変えて今後もつづけられる予定である。



調査対象地域プロット図